

渡部昇一著「ドイツ参謀本部」中央公論社、中公文庫 1986年10月10日刊を読む

ドイツ参謀本部

1. シャルンホルストによって創設された参謀本部が、初期の試練に耐えて、一つの恒久的な組織としてプロイセン陸軍の中に根を下すに至ったのは、一にかかってグナイゼナウのおかげである。
2. とはいっても、その存在の法律的・機能的定義は明らかにされておらず、また軍事大臣や高級副官部や国王の軍事内局との関係もまだすっきりしなかった。
3. にもかかわらず、ともかくも参謀本部は
 - (1) 平時においても解散されることなく軍事省内に存在し続け
 - (2) 次の戦争の準備をし
 - (3) 高級将校の卵たちを教育し
 - (4) 科学的な訓練を与え
 - (5) 将来の戦場となる可能性のある地域の地図を完備させ
 - (6) 隣国の軍隊を研究し続けることになったのである。

P.102

《補足》

- (1) ナポレオンは、ヨーロッパにナショナリズムと新型の戦争を残して、舞台をさびしく去っていった。もちろん彼は、フランス革命の子ではあったが、それが自ら帝位につき、しかも彼が失脚した後は、ルイ 18 世が即位し、またもや古い王統(ブルボン王朝)が復活したのである。
- (2) フランス革命の勃発以来、どれほどの人命が失われたであろうか。ギロチンに消えた人たちだけでなく、十数年の長期にわたるナポレオン戦争のため、ヨーロッパ中が徴兵制度を導入し、かつてない規模で殺し合ったのだ。「メッテルニッヒ体制」は反動と言われるが、それが成功したのは革命の夢が破れ、昔のほうがよかったと感ずる人のほうが多数を占めてきたということでもあったのである。

P.103

[コメント]

「知的生活の方法」の著者として有名な上智大学名誉教授の名著、「ドイツ参謀本部」。ナポレオンを打ち負かしたのがプロシアの参謀本部であることを知る人は少ない。ビスマルクの名参謀モルトケの誕生前の参謀本部の歴史は興味が尽きない。

* 1789年フランス革命は一体何だったのだろうと考えざるを得ない。

* 歴史にもしはないにしても、もし参謀本部が機能を果たしたら、ヒットラーの誕生はなかったのではないかとも思える。

* 時代と共に大きく揺れ動くドイツの歴史は驚くことばかりだ。

— 2015年10月4日 林 明夫記 —